

(大陸に入る) などである。

前置詞を用いるべき所でも省かれる場合がある。例えば、相約星期六(土曜日に約束する)、投資大陸(大陸に投資する)などは本来用いるべき前置詞が省かれている。

また、言葉のプラスマイナスの

境界線がそれほど厳格ではなくなっているものもある。例えば、「享受寂寞」(寂しさを享受する)、「遭遇愛情」(恋に遭遇する)、「反省省」(反省する)、「策划」(計画する)などである。

(邦訳 富永清美)

## 『懐念李慎之』の象徴的意義

張 琢

李慎之先生が、二〇〇三年四月二二日午前一〇時、北京協和病院において病のために亡くなられた。この知らせは、電話や電子メールを通して、北京、中国大陸、世界各地へと直ちに伝えられた。その日、私は日本にいて、北京の友人からの国際電話によって、この訃報を知ったのである。

先生が呼吸を止められたのと同じに、多くの友人たちは先生の文章を悼み偲んで筆を執り、二四日になると、たちまちにインターネットのホームページ上に、先生を哀悼するコラムが現れるようになった。秋風氏の主宰する「思想評論」のホームページに限っても、先生の亡くなった後一か月の間

に、一四〇篇ものさまざまな追悼文が投稿されたのである。

一方、哀悼の文章はいくつかの主要な新聞社にも送り届けられた。しかしその大部分は掲載されなかった。ある新聞では二頁を組んだものの、いざ印刷という時になり、原稿は削除されてしまった。

こうした状況下に、生前の親しい友人や先生の思想に共感を抱く人たちは、進んで資金を集め、原稿を提供し、奉仕的活動の方法を駆使して、上下巻から成る記念文集『懐念李慎之』(李慎之先生を偲ぶ)を編集し、印刷したのである。

この文集には、コードナンバーも、出版社も、定価もなく、当然、奥付もない。ただ扉の部分に、思索にふける先生の遺影と『李慎之先生を偲ぶ』という書名、それに「二〇〇三年五月」の出版日目が印刷されている。下巻の末尾には「本書は李慎之先生の生前の友人による自発的な寄付により製作され

た。ここに謹んで記念とし、一切の販売は行わない」と記されている。

編者である丁東氏は「編集後記」の中でこう述べる。「本書は内部交流の産物ではあるが、執筆者は中国の思想文化界における何世代もの精鋭たちで、上は九十歳に間近い大学者から、下は二十歳過ぎの学生まで、全国各地、世界各地から参集した人々からなる。専門も、文学・歴史・哲学・経済・政治、ひいては自然科学と遍く全般に及んでおり、多くの賢者たちが揃って集結したと言える」。この二冊の文集を読み終え、この言葉が偽りでないことを実感するとともに、李慎之先生とこの二冊の記念文集の、現代の中国政治思想史において持つ重要性をひしひしと感じることができた。

最後に指摘しておきたい。公に認可されている刊行物では、李慎之先生を記念する文章は発行を禁

じられているのだが、現在に至るまで、この記念文集に対する取り締まりは一向になされていらない。

こうした一見矛盾と見える現象は、中国がIT時代へと移行しながら政治改革の面では活力を失う状況にあつて、思想文化と報道・出版に対する統制の方式が変化を遂げつつあることを如実に反映したものである。報道・出版に対する自由はなお解禁されてはいないが、その統制の手段はすでにある程度緩和されており、意識的あるいは無意識的に、自由と民主、新たな啓蒙に対して、わずかではあるが、行く道と活動の空間の余地を与え始めている。他方、凄まじい勢いで発展するインターネット革命を前にして、中国の伝統文化と専制の累壁は、それを受け止めるだけの動きをすでに消失しつつある。また、両者の複合は、正に中国の政治転換期における過渡的な特徴を構成しているのであ

る。

「二張一弛こそ、文武の道なり」。中国の政治改革は、急速には進展することができないかも知れず、揺れ動くこともあるだろうが、しかし最終的には成功の道を歩み、先駆者の御霊を平安に導くことができよう。

(愛知大学現代中国学部教授)  
(邦訳 北川晶嗣)

